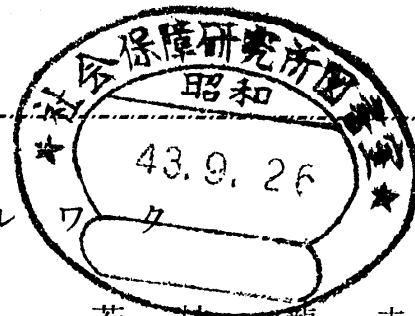


社会保障とソーシャルワーク

若林 龍夫



社会保障とソーシャル・ワーク（専門社会事業）は、一部に誤って解せられているように、互いに矛盾撞着するものでなく、両者は辰齒輔車、相互依存の關係にあり、両者が共にあって始めてそれぞれの機能任務が発揮せられ、国民の福祉が守られ増進されるのである。

かつては社会保障が充実すれば、ソーシャル・ワークは不要となるかのように主張されたこともあるが、そうではなく社会保障が充実し社会資源が拡充されることによって、ソーシャル・ワークはその本来の機能を發揮することができるのである。これをソーシャル・ワークの立場からいえば、ソーシャル・ワークがその本来の任務機能を發揮できるためには、社会保障が拡充強化されねばならぬのである。したがって両者は相互依存の關係にあり、そのいずれを欠くも国民の福祉を守ることはできない。いまその理由をもう少し詳しく述べてみよう。

人間を抽象的でなく具体的に捕えてみると、人間はその行動と引離して考えることはできない。人間とは行動するものであり、人間の生活は行動の連続的統一であるといわねばならない。ところで人間を行動に駆り立てるものは何か。それは欲求である。

人間は生きている限り、様々の欲求を抱き、これを充足しようとしてたえず狂奔するのであるが、その基本的なものは四種であるといわれる。すなわち安定への欲求、感情的な反応への欲求、社会的認知への欲求、達成への欲求である。もちろんこれらの欲求は単独に起ることはなく、互いにかみあい、あるいは強めあい、あるいは弱めあって起るのであるが、その満される場所は社会である。人間は社会においてこれらの基本的欲求を充足することによって生活するのである。

さて人間が社会に生れ、これらの基本的欲求を抱き、これを社会において充足することによって生きるものであることを述べたが、いうまでもなくこれは人間をその共通性において捕えたものである。しかし実際の人間には個人差があり、一人一人が違っている。一人として同じ人間はないのである。したがってこれらの欲求についてもその表現の仕方、充足の方法はそれぞれ異っている。基本的には同じ共通の欲求であっても、その現われ方、充足の仕方はそれぞれ違うのである。ここに人間の基本的欲求を満すに当って同一的共通性に対する方策と個別的相違性に対する方策との二つの方法がなければならぬことは明らかである。

ことがらを簡単にするために、生活安定への欲求が満されなくなった人々の場合を考えてみよう。これらの人々を普通の生活に復帰させるための方策は二つとなる。一つはこれらの人々の失った生活を可能にするための社会資源を確保または創出することであり、いま一つはその資源を個別化して適用することである。前者には諸種の社会保険、公的扶助等社会保障の制度があげられるが、後者はこれらの社会資源を個々の人々の実情に応じて動員活用する技術方法＝ソーシャル・ワークがそれに当る。ここでは安定への欲求を例としてあげたが、このことは他の欲求の場合も同じであり、したがって同一性共通性に対する方策と個別性相違性に対する方策がなければならない。前者の備えに当るものが社会保障であり、後者の守備に当るものがソーシャル・ワークである。

社会保障とソーシャル・ワークは共に手を携えて進むべきものであり、そうでなければ人間の福祉は守ることはできない。